



笈

川

日本語教師

幸

司



異文化 に 学 ぶ

vol.9
Special Interview
Koji Oikawa

取材・文：いしもとあやこ 写真：鹿野貴司（p.4、7上）

熱血日本語教師として、北京の学習者に親しまれる笈川幸司さん。
現在は中国45都市の大学で講演を行う「日本語講演マラソン」に挑戦中だ。
資格なしに北京へ渡って10年。その歩みを聞いた。

中国の学生に、日本へ来てほしい。
自分の目で日本を見れば
きっと人生が変わるはずだから

■ 議員秘書、芸人を経て ■ 未経験で北京の日本語教師に

9月某日、中国・北京で一風変わった日本語スピーチコンテストが開催された。総勢40人近くの出場者は全員、男子学生。北京市内の各大学から選抜された優秀な学生ばかりが参加するわけではなく、コンテストへの出場は初めてという「平均的な」学生が大半だ。それでいて、出場者全員が1位から3位のいずれかに入賞でき、賞状ももらえるという。

「一般的なスピーチコンテストでは、女子学生がいい成績を収めることが多いんです。男子にももっと頑張ってもらいたいです。成績のよくない子にも、入賞する喜びを味わせてあげたいんです。賞状があれば家族や友達に自慢できるし、就職活動でも有利になるでしょう」

こう話すのは、「北京の熱血日本語教師」こと笈川幸司さんだ。

1995年から約1年半、北京に語学留学をしていた笈川さん。当時知り合い、帰国後も交際を続けていた中国人女性と結婚するため、2001年夏に北京へ移住した。ところが、あっという間に結婚生活は破綻。すでに民間の語学学校で日本語を教えていた笈川さんは独り、教師として北京にとどまる決意を固めた。

それから10年。今、笈川さんは、中国で大活躍する日本語教師として注目を集めている。これまでに北京大学や清華大学といった名門校をはじめ、北京市内のさまざまな大学の学生を指導。スピーチコンテストでは多くの教え子を優勝へと導き、「笈川先生の指導はすごい」と一目置かれるまでになった。

日本語教師として、エリート街道を歩んできたわけではない。それどころか、極めて異色な経歴の持ち主だ。衆議院議員の秘書を務めた時期もあれば、プロのお

笑い芸人として、テレビのお笑い番組に出演したこともある。北京に来た当時は日本語教師の資格もなかったが、知人の紹介で語学学校の面接を受けた。

「中国の採用面接って、すごくおおらかなんですよ。最初にお茶を出してくれて、その後は『このお茶は産地がどこで、値段はいくらで……』という話をずっとしてるんです。お茶の話が終わったら、今度はお茶菓子の話。そんな具合で雑談ばかりしていて、最後は『そろそろ出掛けるから、契約書にサインして、明日から来てください』って(笑)」

■ 学生たちとの濃密な付き合いが ■ 発音データの蓄積につながった

翌日は模擬授業。教え方も何もわからない状態だったが、笈川さんは堂々と教室へ入った。そして学生たちを起立させ、自らは椅子の上に立ち上がって、大声で短文のリポート練習を始めたのである。笈川さんが「今、何時ですか〜！」と叫べば、続けて生徒たちも叫ぶ。ひと通り教科書の例文を読み終えたら、「はい、もう一回！」と頭から繰り返す。まるで、運動部の筋トレを思わせる授業だ。

「暑い夏の日で、教室にはクーラーもありませんでした。そんな中で学生たちにひたすら大声を出させたら、いつ音を上

げるかな、と思ったんです(笑)。愚痴をこぼした学生には、その学生だけでもう一度リピートさせたりしてね」

型破りな授業は、意外にも学生たちに大受け。日本語教師としての1日目は、大成功に終わった。

複数の大学で講師を務めた後、翌年には清華大学で教えることになった。同校ですでに教えていた日本語教師の駒澤千鶴先生と出会ったことで、笈川さんは教師として大きな成長を遂げる。

「駒澤先生に会うまでは、何もわからず、ただ勢いで授業を乗り切っていました。駒澤先生はそんな僕を見て、授業の進め方や教案の書き方などを一から教えてくれたんです。『基本のやり方を知った上で、あなたの好きなようにやればいい』と言って、ほとんど毎日のように、夜中まで個人指導をしてくれました」

さらに、中国人の学生や同僚との濃い付き合いが、発音指導における何よりの実地研修となった。

「授業時間の他にも、朝から晩まで、学生や同僚からの『発音を直してほしい』というリクエストに応えました。夕方には学生と一緒にジョギングに出掛けましたし、昼食や夕飯も学生と一緒に。本当に、起きてから寝るまで彼らの日本語を聞いているような感じでした。そうした生活の中で膨大なデータが蓄積されて、やがて、中国人学習者に共通する『苦手な音』のルールが見えてきたんです」

■ 中国全土の大学で学生に会う ■ 「日本語講演マラソン」を開始

自身が見いだしたルールを元に、笈川さんは「笈川楽譜」を考案した。中国人学習者が自然に発音できるように、日本語のイントネーションを独自の記号で表したものだ。笈川楽譜を取り入れた「笈川日本語教科書」シリーズも出版され、中

More Information

『笈川日本語 朗読教科書』

笈川楽譜が盛り込まれた、MP3形式のCD付き朗読教科書。マーティン・ルーサー・キング牧師、夏目漱石、魯迅など、30の名文を笈川さん自ら吹き込んでいる。発音やリズムについての詳しい解説があるので、スピーチ力を上げたい中国人学生に人気の教科書。amazon.cnで購入可能。



大連理工大学出版社刊
定価：30円

国の学習者たちに好評を博している。

もちろん、教えるのは発音だけにとどまらない。スピーチコンテストに出場する学生を指導するとき、何より大切なのは「心が入るかどうか」と、笈川さんは語気を強める。

「あるコンテストの前日、僕が指導していた学生のスピーチが、どうしてもうまくいかなかったんです。発音も内容もいいのに、表現力があと一步。夜中まで指導と練習を繰り返しましたが、それでもうまくいかないの、最後の手段として駒澤先生に電話をかけて来ていただきました。夜中の1時ですよ。それでも駆けつけてくれた駒澤先生の姿に胸を打たれて、学生はついに心の入った、感動的なスピーチを披露してくれました。翌日の本番では、見事優勝しましたよ」

日中国交正常化40周年に当たる2012年を前に、笈川さんは今、新たな大事業にチャレンジしている。中国の45都市、約540大学を回り、延べ11万人の前で講演する「日本語講演マラソン」だ。

「語学学校で1日目の授業をしたときから、いつかは中国全土の学生たちを指導したいと考えていました。実現のきっかけとなったのは、揚州市に住む、ある学生の声です。『こんなに小さい町には、笈川先生は来てくれないだろう』と残念がっていたという話を聞いて、これは全国を回るしかないと決意しました」

今年9月、大連を皮切りにスタート。講演では笈川楽譜を中心に、日本語の発音とスピーチのコツ、効率のよい日本語学習法を、ユーモアと熱意あふれる「笈川節」で指導する。

「学生たちに日本に興味を持ってもらって、とにかく一度でいいから日本に来てほしい。自分の目で日本を見てほしいんです。それだけで、きっと彼らの人生は変わります。逆もちろん同じで、日



Oikawa Koji

1970年、埼玉県生まれ。日本大学文理学部教育学科卒業。衆議院議員公設秘書を務めた後、お笑い芸人としてNHK「爆笑オンエアバトル」などに出演。芸能界を引退後、2001年に北京へ。語学学校で講師に着任したのを皮切りに、清華大学、北京大学などで講師を歴任。2011年9月には、中国各地の大学を回る「日本語講演マラソン」をスタート。

本人にも、一度は中国に来て、自分の目でこの国を見てほしいですね」

笈川さんいわく、中国は「チャンスを生かせる国」。ゼロからスタートし、周囲の助けと自らの努力で成功をつかんだ人ならでの、説得力ある言葉だ。

私生活も順風満帆。北京で日本語教師をしていた奥様と結婚し、来年には家族が一人増える予定だ。これからは三人四脚で、中国各地を駆け回る。熱血教師の勢いは、まだまだ止まらない。



北京の日本大使館で開催された、男子学生によるスピーチコンテスト。幅広いテーマで1分間、日本語のスピーチを披露した。